

中国研究月報

Monthly Journal of Chinese Affairs

Vol.69 No. 5 (No.807)

2015年5月号

- | | |
|-------|--|
| ▷論文 | 1960年代前半における中国とアフリカの関係——第二回アジア・ |
| 村上亨二 | 1 アフリカ会議と第二回非同盟首脳会議の開催をめぐる—— |
| ▷書評 | 高原明生・菱田雅晴・村田雄二郎・毛里和子編 岩波書店 |
| 辻 康吾 | 16 『共同討議 日中関係 なにが問題か——1972年体制の再検証——』 |
| ▷書評 | 江藤名保子著 勁草書房 |
| 砂山幸雄 | 20 『中国ナショナリズムのなかの日本——「愛国主義」の変容と歴史認識問題』 |
| ▷書評 | 李荘著 田所竹彦訳 日本橋報社 |
| 石井 弓 | 23 『抗日戦争と私——元人民日報編集長の回想録』 |
| ▷書評 | 柳沢遊・木村健二・浅田進史編著 慶應義塾大学出版会 |
| 小池 求 | 26 『日本帝国勢力圏の東アジア都市経済』 |
| ▷書評 | 吉尾寛編 汲古書院 |
| 馬場 毅 | 29 『民衆反乱と中華世界——新しい中国史像の構築に向けて——』 |
| ▷書評 | 小谷一郎著 汲古書院 |
| 大東和重 | 36 『創造社研究——創造社と日本』 |
| ▷報告 | |
| 久保茉莉子 | 38 第15回兩岸三地歴史学研究生論文発表会参加記 |
| ▷資料 | 44 中国研究所図書館新着図書目録 91号 |



〈書評〉

李荘著 田所竹彦訳 日本橋報社

『抗日戦争と私——元人民日報編集長の回想録』

(東京大学) 石井 弓

1. はじめに

本書は「人民日報」の編集長兼社長を務めた著者李荘の「難得清醒」（醒めているのは難しい）と題した中国語の自伝のうち、日中戦争期を描いた部分の邦訳である。1918年河北省徐水に生まれた李荘は、1938年より閩錫山の出身する民族革命大学に入学、「民族革命」半月刊を創刊し朱徳のインタビュー記事を掲載したのを皮切りに、日中戦争から国共内戦にかけて、抗日軍政大学に学び、山西省東南部で従軍記者として活動した。建国後は「人民日報」編集長兼社長となり、文革期の批判を経て名誉回復するなど、2006年に亡くなるまで激動の中国近現代史を新聞記者の立場から見聞きし生き抜いてきた人物である。整風運動、土地改革、大躍進、文革を経験し、その過程で自己反省、自己批判を行い自らの思想や行動を点検してきた。そうした経験によって培われた自己分析的な視点が、本書を貫いている。1998年（80歳）の時点での視点を交えて書かれた文章には、当時と現在を行き来しつつ思考する著者の視線も読み取ることができる。

李荘は生前「戦争や建国初期までは頭の中身も行動も明確だったが、50年代中、後期から党の政策の一部、時にはその路線や方針も良く理解できなくなった」と再三語っていたという。原著の「難得清醒」という標題は、清中期の文人鄭板橋の「難得糊塗」（バカであり続けるのは難しい）を逆説的に利用してつけられた。つまり、建国以前は「清醒」（はっきりした）であった頭が、その後は「糊塗」（ぼんやりした）になったという意味で、「醒めているのは難しい」という原著の重心は建国後の部分にある。このために、内容を日

中戦争期に絞った本書（邦訳版）の読者は、最も知りたい部分を読み進められないもどかしさを感じるかも知れない。ただ、著者の一貫した考えは日中戦争期を描いた文章にもちりばめられているため、評者も邦訳から全体を想像しつつ評することとする。

2. 本書の概要

本書の構成は、第一章「出発」、第二章「探索」、第三章「追求」、第四章「苦闘」、第五章「登攀」、第六章「建国」であり、著者の人生を時系列で描いている。第一章と第六章のみ原著と異なるが、それ以外は原著の通り訳出された。第一章では河北省徐水の没落する地主の家庭に生まれ育った著者の出自が語られる。この出自が社会主義中国の中で、長い間著者を悩ませることとなる。第二章では、民族革命大学入学から「上党通信」での記者活動までが描かれる。著者は1937年、故郷の徐水に流れ込んできた盧溝橋事件の敗残兵から逃げるようにして家を出て、山西省にあった「民族革命大学」に入学する。同大学は軍閥閩錫山が校長を務めるにも拘わらず、毛沢東の『持久戦論』が読まれ、国民党のパンフレットも配られる自由な校風だった。卒業後に記者として勤めた「民族革命通信社」もまた、閩錫山の出身でありながら、編集者や記者のほとんどが地下共産黨員という複雑な組織であり、当時の山西省の混沌とした状況が描かれる。著者はその間幾度か入党を促されるが、「党外ボリシェビキ」として自由に活動したいと断り続けた。入党は著者にとって自ら選び取る選択肢のひとつであったことが分かる。第三章では、山西省東部の抗日軍政大学（抗大）入学後に入党を決意し、「百团大戦」の取材に当たった経験が描かれる。著者が抗大で学ぶことができたのはわずか4か月、授業の内容よりもその間の実戦への参加、食糧運搬、入党審査が記述の中心となっている。第四章では、『勝利報』、『晋察冀日報』、

『新華日報』（華北版）へと所属を転々としながら、従軍記者活動を本格化させていく過程が描かれる。この時期は日本軍による1942年の掃討作戦に当たり、著者は少なからぬ戦闘に参加する。それと並行して土地政策のための対地主闘争を取材し、整風運動に参加することによって自己の思想を徹底的に点検し、そこにはっきり言葉にできない意識があることに思い悩む。自身の意識や感情のあるべき思想との対比によって徹底解剖していく整風による思想改造は、こうして著者によって内面化された。第五章は、日中戦争勝利後の土地改革、内戦後の『人民日報』創刊、そして北京入城と『人民日報』の党中央機関紙への昇格が描かれる。またその間のソ連一辺倒の政策、反右派闘争、大躍進などの出来事について、個人的な思考のゆらぎと、それを許さない意識の間で錯綜する気持ちが率直に叙述される。第六章は、短い章となっており、内容は中央機関紙となって間もない『人民日報』の編集に集中し、真実と、それを書くことによる政治的影響との間で「どう書くか」の問題に悩まされたことが強調されている。これらに訳者である元朝日新聞北京支局長の田所竹彦氏が詳細な注を付しており、本書を通した中国理解の幅を広げている。

3. 本書の特徴

日中戦争期の圧倒的な量の情報は、著者独自の方法で保存された。ひとつには、著者が記事にしなかった出来事も幅広く取材しており、そのメモを保存していたことによる。もうひとつは、入党審査や整風運動における度重なる身分審査の過程で、著者が反復的に証言した過去の記録が利用されている。例えば「民族革命通信社」時代に国民党の領袖を取材したことが、入党時や整風運動において審査の対象となるが、第二章の「探索」はまさにその内容を紹介したものだ。このため、人名、地名、日付が驚くほど詳細に記録され、日中

戦争期山西省における共産党、国民党、閻錫山の諸勢力や犠牲救国同盟会、決死隊などの組織のありなす複雑な勢力図が、本書から浮かび上がる。この時期の山西省における諸勢力は、表向きの立場と実態が異なることが多く、文献史料からは把握し難い。本書の記述はそうした当時の実態を理解する助けとなるものである。このように詳細な記録や記憶を可能にした政治運動や身分審査は、著者にとってある種の「記憶装置」の役割を果たしたと言える。

著者が日中戦争時に残したメモは、敵であった傀儡軍や「漢奸」について率直に語っている。「傀儡軍」については、「捕まえられて来た者、騙されて来た者、雇われたが金を貰えない者などがいたが、日本兵にいじめられ、中国人から軽蔑され、それでも敵のために命を捨てられるだろうか」（135頁）と同情を寄せる一方、こうした板挟みで困難な立場を共産党軍に投降せずに自爆した日本兵の「命令に従い死を恐れない」姿と対比させ、日本兵については「問題は彼らを正しい道か、間違った道か、どちらに導くかにある」（137頁）と説く。「民族の裏切り者」として厳しい批判の対象とされてきた「漢奸」の実態は、複雑で一刀両断できるものではない。「傀儡軍」に兵士を出さねばならなかったコミュニティにとっては、建国後に彼らを「漢奸」として批判すること自体が心理的な負担となってきたが、このような事態を描く本も、執筆を許す環境も中国にはないのが実情である。その意味で著者のメモは複雑で発言しにくい問題を当事者の感覚として伝えていると言える。こうした記事は著者が「当時考え書き留めておいたこと」であり「思想の蓄積として扱い、文章に書いたことはない」（137頁）という。

このような方法によって描かれた本書の特徴は、記録には残らないような歴史の細部がむしろ詳細に描かれていることである。「日本人覚醒連盟」（後の「反戦同盟華北連合会」）もそのひとつで、

これは捕虜になった日本人・軍属らによって発足された組織で日本ではあまり知られていないが、本書では抵抗し続ける日本軍へ投降を呼びかけたり、劉伯承の祝賀会で日本人代表として挨拶したりするなどその積極的な活動が頻繁に叙述される。著者は山西省の農村を訪ね歩いてインタビューをしており、当時古希に近い読書人が問いかげに漢詩を用いて答えたり、農村の女性が自らを「人」に含めないほど差別意識を内面化していたことが、彼らの口調を活かした筆致で紹介されている。今はもう聞き取ることでできない過去の人々の声を、評者は興味深く読んだ。ただ、日中戦争期の出来事をこれほど詳細に描きながら、農村の被害の実態、特に女性の性暴力被害についての記述がないことは残念に思われた。

4. 本書から何を見出すか

歴史書でも文学書でもない本書は、表面的には読みやすく感じられるが、読み込んでいくと注意しなければならない表現がいくつもあることに気付く。ここでは原題の「難得清醒」に絞って、この言葉から何を見出すのかを論じてみたい。訳者が解説しているように著者は、建国前ははっきり（「清醒」）していた頭が、建国後から文革にかけてぼんやりした状態（「糊塗」）になった。しかし文革という「この異常現象が十年も続き、私は長期の困惑の末にやっと頭がハッキリしてきた」（132頁。傍点は評者、以下同じ）と言う。即ち本書は文革を経て再び「清醒」になった頭で過去を振り返って書かれているのだが、果たしてそれは以前の「清醒」と同じ意識だろうか。著者の過去を振り返る「清醒」な思考は、建国以前の「清醒」にも批判の目を向けているように見える。

総じて「清醒」だったとされる建国以前の叙述にも頭が「糊塗」になるという状態がしばしば現れる。特に土地改革においてそれが顕著で、著者は土地改革の宣伝中、「長く思想が明確でない誤

りを犯してきた」（171頁）と告白する。「土地改革の高潮をよそに、私はぼんやりしていた」。「地主分子が上から吊るされてなぐられるのを見て、内心かわいそうだった。地主の一家が自分の家から追い出されるのも、やり過ぎだと思った。普段はぶらぶら遊んでいて人に相手にされない者が突然「勇敢分子」になって飛び回っているのは疎ましかった。自分のこんな受け止め方がどんな思想、情緒なのか。私にははっきり言えなかった」（170頁）。ここから読み取られるのは、あるべき思考との対比によって自分の思想や感情を検討し、それがどういうものであるかを「言わなければならない」というほとんど強迫的なまでの意識である。しかしどれほど突き詰めて検討したとしても、なおそこにはっきり言えない何かが残る。それが著者にとっての「糊塗」であり、党の思想と違和を来たした整理できない感覚のことを指している。だとすれば、「長期の困惑」を経てようやく辿り着いた文革後の「清醒」は、建国前の「清醒」とは異なる性質のものであったと考えねばならないだろう。つまり、整風運動で党の路線とびったり一致したと感じられた思想の中にもどこか政策に対する違和感としての「糊塗」があったが、文革後の醒めた頭には、むしろ当時の「糊塗」にこそ現在の「清醒」につながる芽があったと感じられるのである。この「清醒」と「糊塗」の往復と変遷こそが、社会主義中国を生き抜き、常に思考し続けてきた著者が人生の最期に記した自己表現であり、そのことが「難得清醒」という標題に込められているのである。本書は中国語で書かれ出版された自伝である。全体として率直な物言いの中にも言い尽くせない著者の意識があり、そのことが鄭板橋の言葉を借りて現在に表現されていると言える。生涯を新聞記者として生きてきた著者のメッセージは深く重い。

（2012年11月刊、254ページ、本体2,800円＋税）